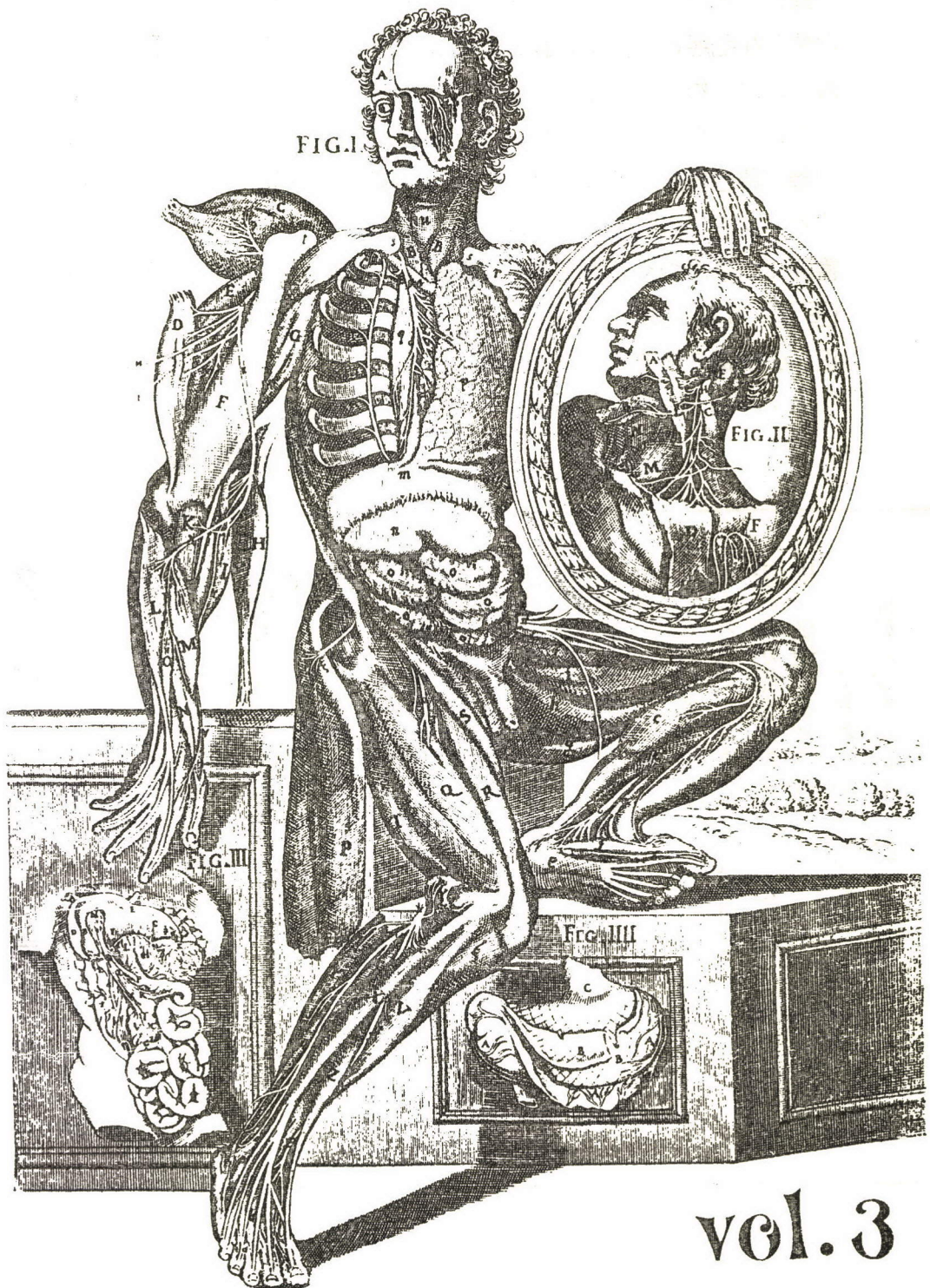


CRAZY JANE



vol. 3

CONTENTS

一裁判傍聴記—「職場で闘う」ということ	萩野はるか	3
女性の在宅無賃労働に介護をゆだねないで!!	村上知世子	6
飛ぶのがこわい	ねこいるか	7
したい・しない・したくない	もん	9
玉蟲の舞台日記—1995年9月~10月上旬篇	玉蟲	10
「サタンタンゴ」という名の人生	玉蟲	14
書評『戦争がつくる女性像』（若桑みどり著）	市川恵里	16
ちのみち通信のコーナー		
正しい抗議の仕方	マヌルねこ	18
・・・From Editor Jane		20



クレイジー・ジェーン、司教と語る

W・B・イエイツ 訳／玉蟲

あたしは道で司教に会った
そうしてあれこれしゃべった

「おまえの胸も今じゃしなびて平べったい

血管もじきにひからびよう

穢らしい豚小屋を捨て

天のやかたで暮らすがいい」

「綺麗と穢いは身内同士

綺麗には穢いが要るんだよ」とあたしは叫んだ

「友だちはいなくなっただけ、それは

お墓もベッドも打ち消せない真実さ

肉体の低みに落ち

心の誇りで学びとった真実さ」

「女が愛に夢中になると

つんとお高くとまってるけれど

愛の神が館をお据えになったのは

排尿排便するところ

なんだって割れめがなかったら

一体にはなれないものね」

「職場で闘う」といふこと

荻野 はるか



先日、会社を早退して、鄭彦均（チョン・ヒャンギョン）さんの裁判を傍聴しに東京地裁にでかけていった。

鄭さんは父親が韓国人、母親が日本人のいわゆる在日朝鮮人だ。一九八八年に東京都の保健婦として在日外国人ではじめて採用されて、以来ずっと保健婦として働いている。一昨年に主任試験に合格、昨年、上司の勧めもあり管理職試験を受けようとしたところ、都から受験を拒否される。それは、「管理職や一般事務職など公権力行使する公務員は日本国籍が必要である。」という自治省の見解に沿ったことだった。

一九七〇年代以降、民族差別の解消を求める運動のなかで、公務員についても、その国籍条項（日本国籍を有しないと受験資格がない）を疑問視し、撤廃を要求する声が高まってきた。そうした運動の成果として、地方自治体レベルでは、徐々にではあるが、国籍条項を撤廃し、門戸を一般事務職まで広げて解放するところも増えてきている。（逗子市などはいっさい外国籍ということでの差別はないそうだ。）しかし、東京都をはじめとする都道府県では、看護婦や保健婦、電車運転士など「人手がとにかく欲しい！」職種に限定しており、一般事務職や技術職では採用実績はない。管理職になっている人も全くない。

彼女が都を相手どって起こしたこの裁判は、実際に採用された

日本国籍を持たない者に対し、その国籍ゆえに処遇の上で格差を設けることの是非を問うものだ。

「公権力の行使または公の意思形成の参画に携わる蓋然性の高い職種に外国人が就けないのは、明文規定も必要のないほどの当然の法理」だ、と政府や東京都は主張する。しかし、それは本当に「当然のこと」なのか。「国籍」は、その人個人の人格や資質を超え、それほど大切なことなのか。

九月二七日の公判では、原告本人に対する証人尋問が約一時間半にわたって行われた。この証人尋問で、訴訟に踏み切るまでの彼女の軌跡が述べられた。尋問するのは、原告側の弁護士、金敬得（キム・キョンドク）氏。金氏も、七〇年代後半、それまで国籍条項のあった司法習修制度を撤廃させ、在日朝鮮人としてはじめて弁護士になった人だ。彼の質問に、鄭さんは穏やかによみなく語っていく。

彼女が生まれる前の両親のこと、家族構成、学校時代のこと、就職のこと……。証言はまさに「自分をさらす」作業だ。執筆を作業とする父親が、疎開先の岩手県で、列車から降りた途端に逮捕されてしまい（反戦的・反天皇制的な文章を書いたから、ということなので、多分「治安維持法」違反ということだったのだと思

われる)、数年間獄に繋がれたこと、そして戦後、出所してからは、獄中での拷問が原因で精神的に障害をきたし、働くことができなくなつたことなどを彼女の口から聞いたときには本当にやりきれない思いがした。

岩手での小学校時代には、朝鮮人ということ、「いじめ」に合、中高校時代には、教師のほうから、日本名Ⅱ「通称」を名乗ることを勧められたという。「通称」を使用している時、友人たちを「騙している」という罪悪感で自分を卑下することを覚え、劣等感でいっぱいになっていった。貧しさから、大学受験を断念せざるを得ず、「それでは」と、女性が差別されない看護婦という職業に就こうと進路を切り替えたが、採用どころか受験できる病院は「件しかなかつた。ようやく兄のついで、川崎の診療所で働きはじめて、そこではじめて自分の家族以外の「在日」と出会う。自分のアイデンティティを確かめたくて、病院での勤めをやめ、「あこがれ」の韓国に留学したが、結局自分は「韓国・朝鮮人」ではなく、「在日朝鮮人」でしかあり得ないということを感じて帰国する。大きな挫折感だけが残る。

語られる「自己史」に言葉を失う。生身の「在日朝鮮人」が置かれた現在の生き難さを改めて思い知らされる。

(直接的な強制Ⅱ「強制連行」であれ、労働政策による間接的な強制であれ)日本に定住し、戦後も生活基盤を日本に置かざるを得なかつた人々「在日1世」。彼らはまた、戦前、植民地化政策によって、強制的に日本国籍にさせられ、戦後、天皇の最後の勅令によって今度は一方的にその国籍を剥奪された人々でもあつた。その子どもたちである鄭さんのような「在日2世」、或いは「3世」は、その父母や祖父たちの世代が抱くような「本國志向」を持ちようがない世代の人々だ。(抽象的なレベルでは可能なのか

もしれないが。)日本語を自分の言葉として操る彼らと、私を含む日本人との間では、多分、文化や思考様式では違いよりは共通項の方が断然多いだろう。(そもそも「違い」や「共通項」を挙げること自体あまり意味のないことではあるが。)しかし、彼らはその「違い」のほうをことあることに指さされ、「朝鮮に帰れ」「勝手に日本にいるくせに」と不当にも誘われ差別を受け続けている。チマ・チヨゴリの女子高生が日常的に襲われるといった現実が何よりそれを雄弁に物語っている。

日本人の無知と偏見を支えるのが、制度的な壁だ。日本人とまったく同じように税金を払いながら、選挙権はなく、就職に際しては「国籍」故に差別を受ける。制度は差別感を正当化する裏付けとなり、そしてまた差別を再生産していく。

鄭さんは今回の裁判を起こすことを決意した理由について、法廷とは別の場所で、「差別する側にだけは回りたくない、と思つて。」と語っていた。制度的な差別に甘んじることは、自分が差別する側に回るからだ、という含意だ。一九八〇年代の指紋押捺拒否運動もそうだったが、その基底に流れるのは、(被差別者として)日本人や日本社会を告発し断罪する、という姿勢とは異なる、自らを自らの主役として生きたい、という強烈な自己肯定への意思とも呼ぶべきものだ。そして、自分の提起した行動をどこまでも自分自身の問題として引き受けていこうという姿勢だ。

差別されつづけ、深く傷つけられてきた彼女から、その言葉を聞くとき、心からの共感と同時に、彼女にこうして「自分が自分であること」のためにこれほどの格闘を強いてしまう私たち日本人の責任について考えざるを得ない。植民地支配・侵略といった犯した過ちを自分の力で精算することを行っていない「つけ」を、よりによって現在もなお、彼女・彼らが背負わされているのだ、

という気がしてならないからだ。

鄭さんの話で考えてしまったことを最後にひとつ。(以下は、九月二四日に都内某所での講演会で話されたことだ。)

今回の九月の法廷を機に、彼女はこれまで匿名にしてきた名前を(対外的に)公表しようとした。この裁判を自分自身の問題として引き受けるべきだと思っただからだそう。そして、そのことを職場の同僚に話したところ、それまで裁判を行うことには反対しなかった人たちもこぞって反対し、止めたそう。理由は「名前が公表されると、保健所にいやがらせの電話がかかってくるなどで、業務に支障が出る。」というものだった。その言葉の裏には、『裁判に時間を取られているせいで、彼女の仕事分までもが自分たちに廻ってきてしまうことになる。』という本音が見えかくれしていたようだ。

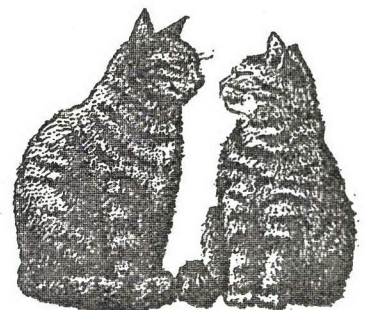
今回の受験拒否という対応がなされるまで、彼女は職場や仕事で差別を感じることは全くなかったという。察するに、彼女が保健婦として「仕事のできる、有能な人」だったからだろう。しかし、裁判に追われ(裁判は、気の遠くなるような時間と体力が必要とされる消耗戦だ)、以前のように仕事ができなくなった。「(裁判にかかりきりになって、肝心の仕事がおろそかになっていると)言われぬように、仕事もきっちりやりたいのだけれど、……とても難しいことです。」と彼女がかみしめるようにつぶやいた一言が私には痛かった。

職場という場所は、多くの人の場合、一番自分の生活時間を占めているところだろう。そういう場で、私なんかは、結局最後のところで、居心地を悪くしたくないばかりに、自分を出さないようにしてしまう。衝突を避けるように無意識に体が反応して、曖昧な表情をうかべてその場をやり過ごす。「きちんと仕事できるよ

うになってから」自己主張しようと考えているうちに、いつの間にか、言いたいことも言わずに妥協すること覚えてしまった。そんな今の私は、「自分らしく」職場に身を置いているとはとても思えない。

利害と本音がぶつかる場で、彼女はそうした人たちに対して発する言葉を作ろうとしていると感じた。裁判を個人として引き受けるということ、はまさしくそういうことだ。しかし、それはとてつもなくしんどいことだ。

言いたいことを言い、その言葉にきちんと責任と勇気を持つ必要を私はいま痛感している。そのための方策を私は何より自分のために考える時期にきているのかもしれない。



鄭香均さんの次回公判は、十二月六日(水)東京地裁七〇号法廷で、午前一〇時半から一二時までとなります。内容は、前回九月二七日にひきつづき、鄭さんの証人尋問となります。

興味のある方、編集部高松宛ご連絡ください(本誌最終ページ参照)。よろしければ、一緒に傍聴に行きましょう。

女性の在宅無賃労働に介護をゆだねないで！

村上知世子

私の職場は四国の田舎の精神病院（二六〇床）だが、入院患者の九割以上が老人である。精神疾患の患者がそのまま年をとって老人になったケースもあるが、家族から捨てられた場合も多い。そりゃ、一晚中歩きまわったり、物を盗られ飯を食っていないと叫ばれたり、ウンチをなすりつけてくるような老人の面倒を二四時間、家族がみるのも厳しい。現在、痴呆老人は全国で一〇〇万人存在するというが、四分の一が病院・施設に、四分の三が在宅という実態である。そして痴呆老人の増加は四〇年後にピークを迎え三四〇万人に達すると予想されている。私も四〇年後は六五歳を超え、その中の一人かもしれない。まず、国の方針はというと、『金がないから、女性（長男の嫁）の無賃労働に頼る』というのが本音のようである。つまり、保険医療の限界もあり長期入院にはベナルティを付け、できるだけ在宅で老人の面倒をみてもらうということである。そのために新ゴールドプランでもデイ・ケアやショート・ステイのように、昼間や短期間なら老人を預かってもらえる施設を充実させていく（地域で中学校規模で増設する）と豪語しているが、現実にはマン・パワー不足でこの急速な時代の変化に対応していけるのかどうか甚だ疑問である。

では今後どのような現象が予測されるかというと、熟年夫婦の離婚である。現在は介護者の八割が女性で、五〇代から六〇代が半数を占めている。役割分業の一つの流れとして、家事↓育児↓介護という枠組みの中で生きてゆける世代が、今は忍耐で乗り切っているが、今後この傾向が引き継がれるとは思いがたい。また核家族化の進行とともに一人の女性への負担が増大する傾向にあり、「嫁だから」で何で私が犠牲にな

るの」と、離婚を試みる熟年女性が出現するであろう。だって家族の絆の子供だって巣立ってしまえば、残るは親や旦那を介護する日々である。自分の親ならともかく、他人の親にどこまで尽くせるかは、我が病院に面会に来る家族の少なさから見ても一目瞭然である。また老人の自殺も増加するのではないだろうか。「子どもの世話にはならない、施設に行く」といって、施設に入れた時代はまだ良かったが、もう家しか残されていないのである。家族に迷惑をかけたくなくても、かけざるをえないのだ。そして今一番問題になっているのは、独居痴呆老人である。今の日本では地域のネットワークで老人をみるという意識は育っていない。フェミニストの皆さん、日本の超高齢化時代を支えるのは家に縛り付けられる在宅無賃労働の嫁ではなく、老人がいようが、障害者がいようが、乳幼児がいようが、大学生の一人暮らしであろうが、世代を超える地域住民のネットワークである。家族が解体され個に向かい、個の集団として自助グループを形成するというのが、世界に類がないほど急速に進展する高齢国家で女性にしわ寄せがいかない手段ではないだろうか。一部で苦勞するのではなく、「皆でちょっとだけ苦勞しようね♥️」という精神は、スケープ・ゴートを産み出す社会では育ちにくいもんであるけれど。

さあ、みんな、今から準備を始めないと、時間は待たててくれないよ。もう行政は頼れない。独自にネットワークを作り、上手に介護を配分しましょう。



飛ぶのがこわい

ねこいるか



いま、私の親は離婚話の真っ最中である。

両親と父方の祖父母は同居しており、母親は長年、わがままな父と祖母にじっと耐えてきた。そして、母親は父親の定年退職の日を、もう四年も前から待っていたのである。もちろん、私と弟は「早く別れなよ」と離婚をけしかけてきた。

父親がめでたく退職したのは今年六月。離婚話の口火が切られ、両親と私と弟を交えての家族会談を開き、「父親と話し合うと、緊張して吐き気がしてしまう。明日にでも荷物をもとめて出ていきたい」と母親は泣きながら訴えた（実際この話し合いのあと、母親は吐いた）。というわけだが、三ヶ月たつても話はいつこうに進展しない。引つ越しの気配もまったくなく、おまけに時折、あきらかに父親がそばにいる気配なのに異常に明るい声で私に電話をかけてくる。

その声の無理無理さに嫌気がさして、「無理しないですよ」と伝えると、急に泣き崩れ

「明日、不動産屋に行ってみる」と言う。で、翌日には「いい不動産屋さんがいない」などと子どものような電話が入る。（断っておくと母親は世間知らずの専業主婦ではない。再就職組とはいえ、長年、会社で正社員として勤めてきた人だ）

こうした態度を見かねてか、弟はいまは急遽態度を変えて、「やっぱりおやじとおふくろは一緒にいてほしい」などといははじめ、母親も「あの子ども親が離婚するのがイヤみただし」といちいちそれを気にする。いま、別れなければ、遠からず祖父母のどちらかが倒れ、その面倒を母が看ることになるのに、ぐずぐずと結論を引き延ばしている。

どうも、母親の中には強固に「いい妻・嫁・母親たること」が第一の価値として刷り込まれているようで、それを守るためなら精神が破壊されてもどうということはないらしい。母方の祖母は嫁姑の関係がうまくいかず、自殺している（これは嫁にいびられちゃった

んだけど）。だから私は、緊張に満ちた家族関係のなかに身を置き続けると、ついには死に至ることがありうることを知っている。実際の肉体の死が訪れなくとも、母親の精神はあきらかに死にかかっている。でも私には助けられない。本人が逃げようと思っていないから。

電話をとおして、その状況を見ざる得ない私自身にとって、これはつらい現実だ。母親の人生を私は背負うことはできない。私は、「お母さんの面倒を私がみるから同居しよう」とはとても言えないし、できれば家族とは二度といっしょに暮らしたくない。

その一方で、誰かがそう言わなければ、母親が祖母のような精神的死・自殺への道をたどっていくように感じる。誰かから、たとえそれが新しい男でもいいのだが、「あなたを私が助けてあげよう」と言われなければ、母親は結局、吐き気を催すような緊張に満ちた家族関係のなかに自分の身を置き続け、離婚には踏み切れないだろう。

父親の前で異常に明るくふるまおうとする母親の声を電話で聞くたび、私自身の気が狂いそうになる（いや、実際、こっちが不安になるようなへんに明るい声なのだ）。自分が助けられない、という無力感と、助けられないと母親の気がおかしくなっていくのではな

いかという恐怖感とで、つらくて、母親との電話のあとはいつも泣いてしまう。

多分、母親も「自分はいい妻・嫁・母親でなければ」という思いと「自由になりたい」という思いのなかで、身二つに裂かれている状態なのだろう。身二つに裂かれる経験は、自分の現実を知るために人にとって必要なこともある。けれど、いま母親が迫られている選択は、「老後も迫り経済的に不安定ななかで自由に一人で生きていく」と「経済的に安定しても気の狂いそうな家族関係のなかに身を置き続けること」のどちらを選ぶか、というその二つだけなのだ。それがいかに母親の現実であるとしても、あまりにきつい。

そうしたことを考えると、問題の解決が「人の強さ」に還元されることも、その「人の強さ」自体を、どこまで信頼してよいものなのかもわからなくなってくる。

一方、私自身といえば、フルタイムの仕事をしていながら、このところとくに胃の痛くなるような日々を送っている。母に対して強烈に、「ああはなりたくない」と思っているから、私は仕事をいったんでも手放すことは絶対したくない。また、「誰が食わせてやっているとってるんだ」と二度と言われたくないから、自分より年収の多い男とは暮らさないだろう。いまいっしょに暮らしている男

との関係はともいい状態だけれど、ここに子どもという関係が入り込むことによって、母親と同じ状態になるのなら、子どもはいらなくともいいと思う。

確かに私は母とは違う。でもそれは、この社会のなかで背負う荷物をいかに少なくするかには私が腐心したというそれだけのことだ。かかってきている重力は同じなわけで、軽くするためにいろいろなものをついていくしかない。その不自由さを嘆けば、多分主婦の人たちは「なにを言うの」と嘲笑うだろう。主婦が家族に束縛される不自由さを嘆くのを、家庭をもたない女たちが嘲笑ってきたように。なにが自由か。なにが不自由か。同じ重力のなかで、それは不毛な問いだ。それでも、そのうえでどちらを選ぶかは運と趣味の問題でしかない。そして、確かに女たちのほうが辛酸を舐めているかのように見えるとしても、人間的なコミュニケーションの力をついには奪われ、二八年連れ添った妻の痛みさえわからなくなっている父親もまた、同じ重力の被害者のように私には見える。

それでも、私は父親を許せない。母親の状態に耐えられない。離婚をすすめずにはいられない。

そう、それは私の趣味の問題で、実際にどうするかは母の趣味の問題だ。私の趣味でい

えば、母親が一人暮らしをはじめて、たくさん友人ができるといい、と思っているけれども、母親の趣味は「我慢して、いつか精神的に死ぬこと」かもしれない。選んでいるのは母親だ。

やがて、考えは自分自身に跳ね返ってくる。同じように「この会社のなかで我慢して、いつか精神的に死ぬこと」を私自身がいま選んでいるとしたら……

私もまた母と同じなのだ。「重力があるのだから仕方ない」と嘆いている。

私はずっとこの「重力」がいつのまにかなくなることを夢見ていた。でも、母とともに私もこの「重力」が、自分が生きている間には決してなくならないであろうことに絶望すべきなのだ。なくならないとしたら、「いまここ」の条件から出発するしかない。「いまここ」の条件を背負って、そのうえで歩き出すしかないのだ。

この間ずっと、歩き出せない母親に私自身が揺さぶられていた。多分、今、電話があればまた揺られてしまうだろう。それでも、この一瞬から、私は自分と母親を信用しようと思おう。すべて、選んでいるのだという一点において。

本当は、母も私もおそろしいほどに自由なのだから。

会社の飲み会で、どつという拍子だったかはもう覚えていないが、話がいきなり、セックスのことに及んだ。その場にいたのは私の他に女性が一人とあとは数名の妻帯者。彼らは、自分がかに妻に尽くし、夜いかに妻のために「励んでいるか」を嬉々として語っていた。

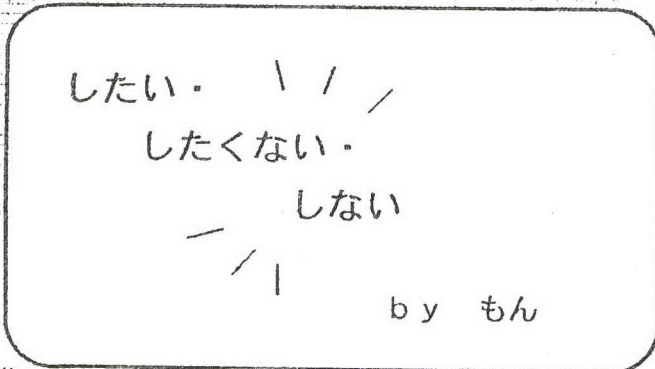
私もつい調子につて、「週に何回くらいしてらんですか？」と質問したら、驚いた。週一回、すこい人になると、「二日に一度は」と答える。まあ、セックスと一言で言っても、その意味するところは人によってちがっているだろうけれど、それ以前の会話で、彼らが「インサート」セックス」と考えているのはだいたい分かっていたので、「そりゃ、すこい」と思わず口走ってしまったのがいけなかった。「じゃあ、オマエのところは？」と切り返されたので、正直に「ないです」と答えた。そして、みんなして「そんなことあるわけないだろう？」と怒っている。

しかし、私からすれば、十何年も同居している相手と定期的なセックス（インサート）し続けられるというのはすこいと思う。そして、それが「当然」と思えることも。最近、そういうった類のことに、とんと「無沙汰」な私には、私よりひとまわり以上も上のおじさんたちから、「セックス（夫婦なら）やって当然」と説教を食らうとは思ってもみなかった。ひょっとして、この人たちより私は体力的に落ちてしまっているんだらうか、歳食ってしまったのだらうか、と一瞬不安になる。しかし、その後の一言で私はキレてしまった。

「相手はどうしてるの？男だったら大変なんじゃないの？」

「男だと『溜まる』から、セックスで抜けないんじや。かわいそうじゃない。」といつとだ、どつしてこのおじさんたちにそんな心配をされなきゃならないんだ、というのと、「男！我慢できない」という余りのオソドックスな矢印の向き方にしては突然となった。だいたい、「男だったら大変」という言葉のバックには、「女にはそういう大変さはないでしょー？」というヘンな優越感が見え隠れしていて、どーにも頭にくる。一体、この人たちは自分たちのつれあいの「性欲」についてどのように考えているんだらう？

そのあとの会話からすると、この日同席した彼らは、「男」性欲、女「愛情」という



図式を固く信じているらしい。そうすると、彼らの妻は「夫を愛しているから、夫の要求に答えているのよ。」ってことになるわけで、彼らが冒頭言っていた「妻のため」って理由が成り立たない。いや待て。ああ、そうか。妻の側が、「愛情の証明」セックスしていること」と考えているとすれば、あなたが、彼らが言っていることとは矛盾しないな、とつらつら考えてしまった。

溜まるからどつしたんだ、と私は言いたい。「溜まる」ことが男に普遍的なことかどつかは、私には全くわかんないことではあるけれど、女について言えば、性欲はある人もいるだろうし、ない人もいるだろう。だいたい何を「性欲」と呼ぶかだつて、考えてみればよく分からない。かく言う私は、多分これが「性欲」と呼ぶのだろう、というものはあるが、そんなことはすっかり忘れてしまつ時期だつてある。（どーやら、私は、周期的には猫並みなんだらうな、と最近思う。）溜まることをもつて「セックス」と直結するというのはぜつたい間違つていいる。溜まることを解消するためなら自分だけで「抜く」ことだつてできる。（これを「オナニー」つて私は呼びたくない。この言葉には、これがセックスよりは「格が下」つていう価値観があると思つから、せめて、セルフ・セックスとでも呼びたい。）

ついでに言うと、「パートナー」がいることと、その「パートナー」とセックスすることは必ずしもイコールではないはず。いろんなカップルがいるんだし、世の中に季節というものがあるように、カップルにだつて、「したくない・しない時期」つてもあつたつて別にいいじゃないかと思つ。だいいち、何をセックスと捉えるかなんて千差万別の善だ。ともかく、「セックス・イズ・ベスト」と考えて行為する人のことをとやかく言つ気はないが、あなたも「自分たちこそが正しい」と誤知りに言つてくる人間には、頭にくる。

それじゃ、私にとつてセックスつて何だらう？つてことになると自分でもよく分からない。セックスを直接的な肌の触れ合いを伴い、気持ちよさを満たすもの、と考えれば、今の私には、「グルーミング」のような「べつたりさ」+減が一番心地よいし、性欲を満たすものつてことになるかと、「セルフ・セックス」が一番だ。

あなたはどつですか。あなたにとつてのセックスつてどんなもの？

玉蟲の舞台日記

—1995年9月～10月上旬篇—

九月二日(木)昼、劇団態変「ダ・キ・シ・メ・タイ!!」金満里作・演出(東京芸術劇場小ホール2)。まず車椅子の観客の多さが際立つ(こんなことで驚かねばならないのは、ふだん他の劇場でそういう人々を目にするのがいかに少ないかという証拠だが)。もらったチラシ類の中には演劇・ダンス関係にまじって「介護者を探します」というチラシが含まれている。結成一二年になる身体障害者のみの劇団「態変」の舞台には、確かに「なまの」肉体がある——。はじめのうち、何か見てはいけないものを見てしまったかのような無意識の罪悪感を感じた。だがそもそも彼ら/彼女らの肉体を「見てはいけない」と思わせるものは何なのか? 制度から外れたその身体こそが、われわれのまなざしに埋め込まれた(制度)をあぶり出すのだ。それを「見てはいけない」と思わせ、見て見ぬふりをさせる制度を。レオタードに包まれたひとりひとりの身体は、ほとんど官能的な存在感を感じさせる。台詞はほとんどないといつていい。脳性麻痺、サリドマイド、小児麻痺後遺症等による障害をもつ男女が

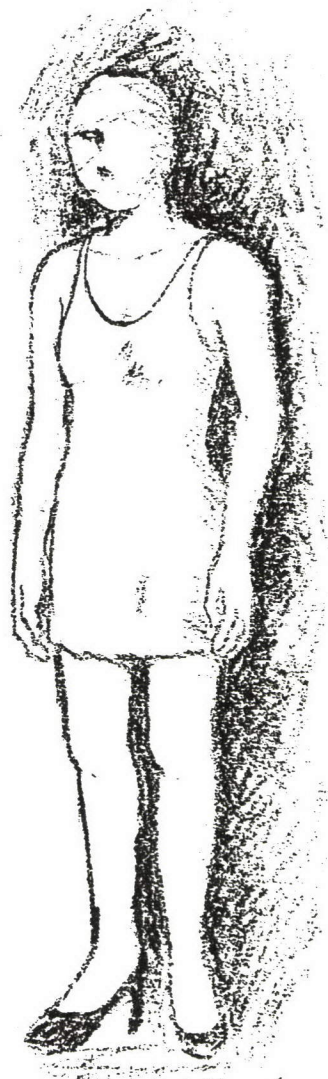
ひたすらに舞台上を這い進み、時にからまりあう。荒くなる息づかい、歪む顔。広いとは言えない舞台を横切るだけでも多大な労力を要する。身体を思うように動かすことの著しい困難。「かなわないな」と思いつつ、むしろ「健常者」と呼ばれる者の肉体の「自由さ」に対する疑いが湧き上がってきた。そもそもわれわれの身体がどれほど自由なものだというのか? それらもまたある種の「不自由」を負った身体ではないのか?

「障害者の身体そのものに最大の表現力がある」「指一本動けば自らと宇宙を表現できる」という金さんの考えは確かにそのとおりではあるが、言葉もなく(パーカッション)主体の生演奏つきではあるが)黙々と舞台を這いまわる場景が延々とつづくように見ている方もつらくなる。仮面の使用などの工夫は見られるものの、長い単調さは舞台構成上・演出上の問題であろう。私の隣の席の若い女性は居眠りをしていましたかと思つたら結局立ち上がって帰ってしまった。近くに坐っていた身障者の女性は気持ちよさそうに眠っていたし、その隣の女性もいか

にも眠そうだった。「気持ちよく眠れる」というのもひよっとしたら一種の美点であるかもしれないが、障害をもった身体が懸命に動いたとしても、それが即「見せる―魅せる」表現につながるわけではないのも事実だと私は考える（とくにこの場合、長丁場の舞台であるから）。そうした意味からも、最後に打って変わって奇抜な衣裳に染しげな動き、祝祭的な雰囲気のうち盛り上がりを見せて幕を閉じたのは非常によかった。身体を動かすことの純粹なよるこびと解放感がそこに見てとれたからだ。出演者の生き生きした顔を見ていると、やっぱり観てよかったなと思えてくる。長く芝居を観てきたが、役者の肉体の存在感によって「生きているんだ」ということを切実に感じさせる作品はそうそうない。生身の肉体の現前。そのなまなましさ、はかなさ、またそれゆえのいとしさ。芝居の、あるいはダンスの醍醐味とは私にとってそこにある。ただ自分の中に、態変の作品を純粹に舞台芸術として評価するというより、「身体障害者の解放運動だから……」的な質的判断の猶予がありはしないかと自問せざる

をえない。障害者だからと下に見るのも障害者だからと称賛するのどちらも間違っている。それは相手を対等と思っていない、相手を特別視した態度だ。ハンデある人々の美しきガンバリに手放して涙し拍手するのみの安直なエセ・ヒューマニズムには警戒せねばならない。これからの態変には各自の肉体のありようと個性を生かした表現の工夫をはかるとともに、もつともつとパワフルになって見る者の視線を規定している（制度）をぶちこわしていつてほしいと身勝手な願いを抱いてしまう。

九月二四日（日）夕、劇団解体社「オルギア」清水信臣作・構成・演出（浅草フランス座）。ふだんはストリップを上演しているフランス座も、下町演劇祭95の期間中は演劇祭参加の一般公演に解放される。劇場前で若い男女を中心とする観客が開場を待っている時、どこかのじいさんが「今日なんかあんの？ ストリップじゃないの？」と不審げに訊いていた。実際壁に貼られたストリップ公演のポスターや場内撮影厳禁の貼り紙のみならず、薄汚い客席の中央に突き出た花道とその先の小さな円形ステージに、普通の劇場と異なった「ストリップ



解体社「オルギア」より 玉子戯画

劇場」らしさを感じても珍しかった。そしてそんな「いかがわしさ」のこもった空間の中で展開される「オルギア」は、「文字どおり犬の目から見られた世界イメージの創出」を狙ったシリーズ「THE DOG」のファイナル・ヴァージョンだという。やはり台詞はほとんどない。物語もない。ここにあるのはバラバラに投げ出された赤裸々な肉体、強迫神経症的な荒々しい動作の反復、執拗な「拘束」のイメージ……都市の身体。（私は見損ねたが、少し前に解体社が東京芸術劇場で上演した「THE PROSCENIUM/TOKYO GHETTO」は「難民と収容所」のイメージに満ちていたらしい）。

私はここでも這いずる身体を見た。汚れた床、舞台の上を、腕のみで這いずっていくその遅々として困難な歩み。障害者ではない役者のその意図的な這いずりは、われわれの身体もまた「不自由」でしかありえない事実を、ある意味で態変以上に強く突きつけてくるものではないか。われわれの眼は本当に見えているのか、手は足は動いているのか、口はしゃべれるのか、耳は聞こえているのか。ゆっくりと無表情に歩むかと

思えば見せびらかし、殴り、すがりつき、歌い、倒れ、歪む役者の身体。女の首に巻きついた犬の首輪は隷属を語るのか。上半身裸で、眼と口をふさがれた二人の女の振れた身体はミケランジェロの《反抗する奴隷》そのままの身ぶりだ。あるいは顔をすっぽりと覆われて一切の肉体的表情を欠落させた身体。われわれの身体が、われわれの状況が、いかに閉塞し不自由であるかがさらけ出される。それは制度から外れた身体ではなく、制度にがんじがらめからめとられたわれわれの身体だ。いやそれだけでなく、同時にそこからしみ出す胡乱なものが、隠蔽されていた身体の不穏な潜在力までもが、露呈されようとしているのではないか？ この日配られたパンフには、「ここでは人間は一切の粉飾を剥奪され、非常な姿で虚無のなかに佇立しています。この苦痛にみちた異郷からいかなる聖性が立ち上がるのか——目指されているのは、ただ（そこに在る）ことの魔的な輝き、そしてもうもろの象徴的行為から生み出される人間諸力の回復とその現出です」（おそらく清水信臣の文章と思われる）とある。

だが率直に言って「ただ（そこに在る）こと」の魔的な輝き」なるものは、今回の舞台では弱々しいものでしかなかった。そうした輝きを放射しえないことこそが、役者の身体に刻みこまれた時代の刻印であるのかもしれないが——。

暴力的な動作の執拗な反復が見る者の内部に食いいつてくるさまや、本物の土を舞台にばらまく点など、ピナ・バウシュの作品を思わせもする。しかし彼女の作品と比べてしまうとある物足りなさを感じてしまう。それはたぶん、ピナ・バウシュの舞台にある「ダンス」としか呼びえないあの魅惑的な動きが欠落しているせいだ。解体社の舞台はあくまでもダンスではない。踊る身体の歓喜はここにはない。それだけに救いが無い……生身の、生き生きした身体ではなく「白く塗らる墓」のごときものが無言で佇むばかりだ。だがこれこそわれわれの身体ではないのか？ アウシュヴィッツを経た今という時代において真にアクチュアルな身体表現の一例ではないのか。民族紛争、難民の大量発生、構造的な貧困、終わりなき暴力。そうした時代の中を生き

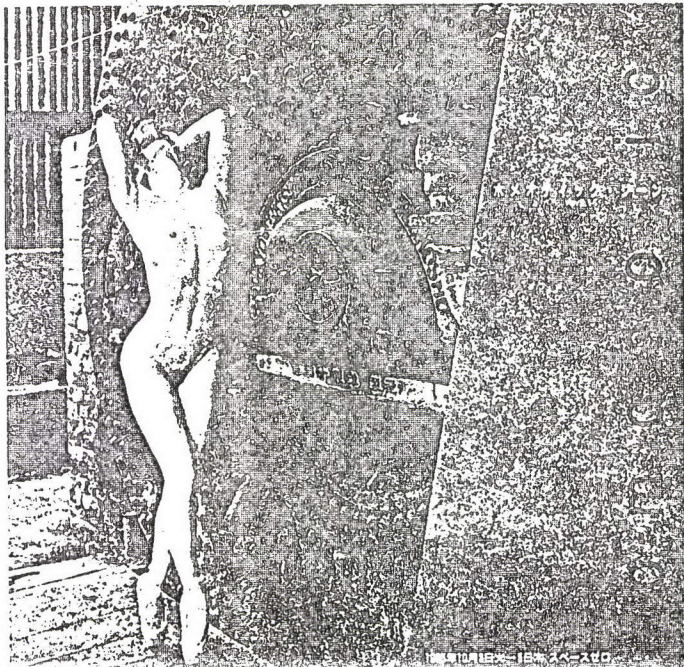
る人間の身体表現のありようを突き詰めようとする解体社の姿勢は高く評価されてしかるべきだろう。近代演劇という制度の中に安住せず、われわれの「今」に徹底してこだわる尖锐な時代意識と実験的な手法こそ「前衛」と呼ばれるのにふさわしい。

「ただ（そこに在る）ことの魔的な輝き」「人間諸力の回復とその現出」が言葉のみでなく舞台上の空間で、役者の身体を通して、実現するさまをいつかこの眼で見たい

一〇月五日（木）昼、H・アール・カオス「ホメオティック・ジーン Ver.2.1」大島早紀子構成・演出・振付（スペース・ゼロ）。今年二月に初演した作品の再演。強烈な赤と黒の美術・衣裳。時に激しく時に繊細な、意表をつく動きの連続。縄梯子と宙づり用チェーンを巧みに使いこなし、舞台上の空間を上下左右縦横無尽に活用する。「ホメオティック……」はひたすらにエロティックで美しい。そもそもタイトルの「ホメオティック・ジーン」とは「人間の身体各パーツが形成される段階で遺伝情報を指示し、時には突然変異の原因とな

る遺伝子」のことをいうらしい。生殖を通じて世代から世代へと受け継がれ、個体の死を超えて永遠を目指して生きのびつつける遺伝子というミクロな単位に注目することで、生と死のプロセスを含んだ生命のいとなみ、その躍動とダイナミズムがあらわになる。ここで「妊娠」が大きなモチーフになっているのがおもしろい。激しく魅かれあうエロスの祭のあとにやってくる妊娠の不安、とまどい、よろこび、苦痛。真っ赤なドレス、腹ぼてスタイルの女性ダンサーたちによる妊婦ダンスは忘れられない（口をおさえてつわりの身振りまであるのがリアル）。H・アール・カオスが大島早紀子と白河直子の二人によって結成された、女性ダンサー主体の（もちろん男性ダンサーもいるけれど）女性ダンスカンパニーであることをやはり意識してしまう。ほぼ全裸に近い女性ダンサーも登場するが、その美しさ、力強さ、魅力に感嘆するばかりだ。「女の身体ってこんなに美しいものだったのか」とすら思わされる。とりわけ白河直子さんの中性的な肢体と力強いダンスにはほればれとしてしまう。これはほと

んど女性による女性のためのダンス、女性が女性の肉体の美を堪能する場ではないだろうか（ちなみに平日の昼という時間帯のせいでもあるが、観客も女性が圧倒的に多かった）。セクシーきわまりないダンスの時も女性ダンサーたちは実に楽しいに堂々と踊ってみせるので、こちらも男の視線を意識した不快さなど感じないのである。



◀「ホメオティック・ジーン Ver. 2.1」チラシ
より

「サタンタンゴ」という名の人生

「サタンタンゴ」SATÁNTÁNGÓ

1991-1993年/438分/35mm/B&W

監督：タル・ベーラ

原作：クラスナホルカイ・ラースロー

◎玉 蟲◎

九月二十九日、第八回東京国際映画祭「アジア映画秀作映画週間」で特別上映されたタル・ベーラ監督のハンガリー映画「サタンタンゴ」は、約四年の歳月をかけて完成された長大な作品である。七時間半（途中休憩二回）という破格の上映時間ゆえ腰痛持ちにはすすめかねる（ちなみに私は腰は問題なかったものの、半分もいかないで眼が充血してしまった）が、忘れられない映像の数々を含んだ特異な映画となつている。欧米の各都市では一般映画館で上映されているというから、日本でも公開される可能性がないわけではない。

舞台は陸の孤島のようなハンガリーの貧しい農村。ひたすら降りつづく雨（しかも村人たちの誰ひとり傘をささない！）とぬかるんだ道。くすんだ村人たち。彼らはここから出て行くことを夢見ながらいつまでも出て行けぬまま、「彼ら」が来るのを待っている。「ゴドー待ち」と「三人姉妹」を合わせたような展開かと一瞬予想したが、それらと違う点は、待たれている「彼ら」が実際に登場することだ。「彼ら」とはイリミアーシュとペトリナという二人の

男である。このイリミアーシュという人物がおもしろい。知的な風貌に黒いひげをたくわえたまだ若い男で、はっきりとキリストのイメージが重ねられてはいるものの、単に口のうまい山師とも反体制テロリストとも警察の犬ともつかない謎の人物なのだ。イリミアーシュの帰還とともに村人たちは一変する。彼が新しい理想的な農村共同体の建設といったような「事業」の計画を弁舌さわやかに語り、資金の不足を訴え、村人たちはやすやすと彼を信じて、自らの労働の成果である大金を手渡ししてしまうのである。イリミアーシュの目的が別にあるのは明らかであり、なぜ彼らがそんなにあっさりだまされてしまうのかと歯痒くなりさえする。しかし（悲惨）でしかありえない人生をまるごと生きている村人たちにとって、彼らを村から連れ出し、彼らの生をより大きな事業目的と結びつけることでそれに意味を与えてくれるイリミアーシュの存在は、待ち望まれていたものなのだろう。「それはこういうことなのだ」と簡潔明瞭な答えを与えて安心させてくれる存在を、人はつねに求めているのではな

ネコいじめのシーンが
けっこうすごかった。といっても

「薔薇の王国」の
ネコはリッケほど
ではないが...

この少女は
ネコをネコイラズ
で殺したあと
自分もネコイラズ
を吞んで
死んでしまう。

単なる
「ネコいじめ」
じゃなくて、
いじめられる
知恵遅れの少女と
いじめられるネコが
重なって見える。



いか。イリミアージュが本物の「メシア」であるか偽「メシア」であるかはおそらくどうでもいいことなのだ。人間は神の実体を知りえなくとも「神」を必要としてきた。人間内部のある根源的な空隙ゆえに、人は神的存在を必要とし、偽キリスト、偽預言者はあとを絶たない。

上映後の監督とのティーチ・インで、会場から長回しやら動物の使い方、原作との違い、演出方法、製作費、興行形態、七時間半という上映時間やらに関する、いわばテクニカルな面での質問しか出なかったの

に対し、タル・ペーラ監督が、私は映画のテクニカルな面について話すのはあまり好きではない、むしろ皆さんと人間というものについて、人生について話し合いたかった。と残念そうに言っていたのが印象に残った。金のことではいいが面白い、仲間を裏切り、飲んだくれ、好色で、疑い深いかと思えばやすやすとだまされ、死を怖れつつ、ぬかるみの中で日々そうでしかありえない生を送りつづける村人たち。だがそうした愚かしく滑稽で残酷な生を描き出す監督のまなざしは、けっして冷たくシニカルなもの

のではない（ぬかるみの頻出と長回しの多用という点でA・ソクーロフを連想することもできるが、ソクーロフの方がはるかに悲観的だ。汚らしくみじめな人生だからこそタル・ペーラは肯定してみせる——「人間とはこういうものです、人生とはこういうものなのです。だからこそすばらしいのです」。人間、動物、そして自然をみつめる監督の視線にこめられた慈しみの深さゆえの、尋常ならざる長回しであり、そうしてみつめつづけた結果としての七時間半であるのかもしれない。

「サタンタンゴ」は原作の小説に基づいている。おそらく原作のエピソードは生かされているのだろうが、通常の直線的な物語展開は見られない。時間もまた直線的に進行しない。同じシーンが複数の視点からくりかえされ、時間は進むかと思えて後戻りし、映画の最後は最初のシーンへとつながっていく。それは堂々めぐりのような円環の時間、石化した時間である。「サタンタンゴ」は、永遠の相のもとにとらえられた人生の姿を映す——少なくとも映そうとしている。

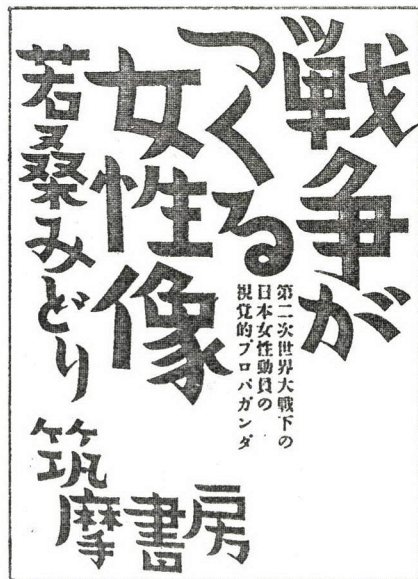
『戦争がつくる女性像』

— 第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ

若桑みどり著 筑摩書房 一九九五年九月刊
四六八判二六八頁 定価二二〇〇円

市川恵里

先の大戦における日本女性の戦争動員、あるいは戦争協力に関する研究は少数ながらも存在するが、当時マスメディアを通して巷に流布していた女性イメージに着目し、その役割を論じた研究は、本書をもって嚆矢とする。若桑氏はまず戦争の原理が家父長制そのものに内在すること、女性がつねにその構造の不可欠の一部をなしてきたことを指摘した上で、洋の東西を問わずさまざまな家父長制文化が「戦争」に関して性的二元論に基づき「戦う兵士」と「産む母」なる強固なイメージ・ステレオタイプを形成してきたことを示している。こうした前提を受けて、第一章では日本の戦時体制における政府の具体的な女性政策およびそれに対応する女性たちの活動を辿り、戦時に女性に求められた役割を「母性」「劣等（補助）労働力」「戦争応援」として明確化する（とりわけ「戦争応援（援護）」という名づけの下に、市井の女性たちと女性指導者たちがともに戦争



に対しあれほどの熱狂を示した事実を重視する若桑氏の視点
は、きわめて今日的な重要性をもったものであろう。そして
第二章ではいわば実証篇として、「主婦之友」を中心とする当
時の人気婦人雑誌の内容およびそこに登場する絵画が例示され
るのである。ここに掲げられた50点以上の貴重な図版のもつ説
得力は直接見てもらうほかはない。一般の女性たちを戦争へと
誘導するのに多大な力を発揮したと思われるこれらのマスメイ
メージは、公式の「戦争画」とはまた別種の重要性をもってい
る。

のつべりした顔に空疎で痴呆的な笑みを浮かべた数々の女性
像（私の友人は沢口靖子のようだと言っていた）の多くはまさ
しく「キツチュ」の極み。なぜ「空疎」で「キツチュ」かとい
えば、それらが生身の女のイメージではなく、時の権力体制が
こうあってほしいと願う理想の女性像にほかならないからだ

(しかもその「プロバガンダ」に血を通わせるだけの技術が画家にないからだ)。それは完璧な理想化を経た、模範となる「よき婦人像」である。圧倒的に多いのは母子像であるが、ほかにも看護婦、工場で働く女性など、登場する女性イメージが政府の女性政策や戦局の移り変わりと軌を一にしているのが興味深い。しつこく現れる「健康で幸福な満州開拓移民の家族像」など露骨に政策そのものである。だが若桑氏がこれら日本の母子像・家族像に西洋キリスト教の伝統的な聖母子像・聖家族像との共通性を見てとっているように、問題は単なる政策プロバガンダを超えてわれわれの深層にからみついて離れない、家父長制文化に根づいた「母性信仰」(それは女性蔑視と一対になっているのだが)、その呪縛の根深さ、強固さであろう。むろん大量の人命を消費する戦争という非常時においてこそ、女の「産む性」が極度にクローズアップされるのは確かだが、それは戦時においてのみ生じる事象ではなく、平時においてもなお連綿としてつづく母性信仰、母性強要の顕現ではないだろうか。戦時の「従軍慰安婦」制度が現在の女性の性をめぐる力関係のありように通底しているのと同様である。しかもこうした女性向けプロバガンダの巧妙なところは、大衆雑誌というマスメディアによって大量かつ安価に提供される、眼を喜ばす「イメージ」という形をとる点である。□当たりのいい、美しく快いイメージの裏にこめられた暗黙のメッセージ。日々無数の商業化されたイメージにさらされつつ種々の「理想の女性像」にふりまわされている現在のわれわれにとって、「慈愛に

満ちた母」「幸福な母子像」の抑圧は遠い過去の出来事と切り捨てるわけにはいくまい。アクチュアルな問題提起として読んでもらいたい一冊である。

なお本書は、基本的には新たな研究領域を提示し、前提となる考え方を示すとともに、整理された素材を具体的に例示することで、今後さらに深められるべき研究の基礎を築くものである。第二章で挙げられた多数の図版についても、細かな分析は今後にまかされている。若桑氏自身、調査の対象となる時代とジャンルを拡大し、志を同じくする仲間とより包括的な共同研究を行う希望を述べており、本書が切り開いた研究の地平がさらに深められていくことを期待したい。



「主婦之友」一九三八年一〇月号表紙

正しい抗議の仕方

マニュアルねこ

フランスは世界中の非難にもかかわらず、二度目の地下核実験を強行した（10月5日現在）。これに対し、わが国でも多くの市民たちが抗議の声を上げ、フランス大使館前でデモをしているようだが、報道で見るとかぎりプラカードや垂れ幕に書かれた言葉にはセンスもパワーもない。そもそも、日本語で書かれたものがあるのはどういうわけか。あれではフランス大使館員たちも表向きは紳士的な対応をしつつ腹の底では嘲っているに違いない。以下のことを参考に、もっと抗議行動を盛り上げようではないか。

① 国旗を燃やす

日本人はあまりやらないようだが、これは他国の大使館に抗議にいった時、必ず最初にやるべき基本である。できるだけ大きな三色旗を用意し、フランス大使館前で景気よく燃やそう。それでこそ抗議する側もさ

れる側もエキサイトするといふものだ。フランス側がかなり怒って面倒なことになったら、「いやあ、国旗を燃やすのは日本に古くからある風習なんですよ」といってアメリカと中国の国旗を取り出して燃やそう。さらに「ほら、自分の国旗だつてこのとおり」と、日の丸も燃やして締めくくることがベスト。

② シラク人形にやりたい放題

これも海外ではよく見られることだが、相手国につくき政治家の人形を作っていたぶるのである。思いつくかぎりの醜悪なデフォルメを施したシラク人形ができたなら、早速フランス大使館前で痰唾かけたり、生ゴミぶつつけたり、尻に爆竹を挿して派手に炸裂させよう。一通りいたぶった後、火あぶりの刑にするか、フランス流にギロチンで首をはねるのも忘れないように。やはりフランス側が文句を言ってきたら、「いや、これはジリノフスキーだ」と言ってしらはつくれよう。そのためには、人形のどこにもシラクと書いてはいけない。

③ 心にしみるパフォーマンス

もういいかげん、ダイ・インなんてダサイパフォーマンスはやめよう。そんなことしたって、誰も何とも

思わない。それよりも、多くの人々の心に訴え、共感を呼ぶディーセントなパフォーマンスを心がけよう。一例を挙げるなら、まずシラクのかぶりもの（マスコク。口の部分は開けておく）を作る。頭の上にキノコ雲をつけるのは当然のお約束だ。それをかぶってフランス大使館前に行き、カエルとカタツムリを食べながら、ギロチンにセットしたコアラの縫いぐるみを犯そう（演技でも本気でも可）。ぐちゃぐちゃに噛んだカエルやカタツムリを口から吐き出しながら「アー、トレビアン！」とか「メルド！」とか叫び、イク時になつたら勢いよく縫いぐるみの首をはねよう。これなら大江健三郎先生も惜しみない拍手を送るにちがいない。

④ 不買運動を超えて

フランス製品の不買運動も少しづつだが広がっているようだ。しかしまだまだ日本は手ぬるい。これをさらに押し進め、不買運動だけでなく、フランス製品愛好者にも無差別攻撃を加えよう。たとえば、フランス車を片っ端からパンクさせてコインで引つ掻き傷をつける、ルイ・ヴィトンなどのブランドものを持つている女性に腐った卵をぶつける、高級フランス料理店の前で放尿と脱糞と嘔吐の限りを尽くす、等が考えられ

るが、ここまでやるとさすがに逮捕されるだろう。しかし、それも計算済みのこと。「たしかに私のやったことは法に触れるかもしれないが、これは核実験という人類と地球に対する許しがたい違法行為への、やむにやまれぬ怒りの表明なのだ」という主張を最後まで通し、警察や法廷でも派手にふるまおう。煽情的な長文の手記を週刊新潮や週刊文春などのイエロー・ジャーナリズムに送りつければなお良いが、二社とも一応文芸出版社なので、日頃から文章の鍛錬をしておくように。たとえばピー——呼ばわりされようが、とにかく多くの人に自分を印象づけることが肝心だ。そうすれば最終的に有罪が確定しても、物好きが支持してくれたり、ピー——な人たちが無差別攻撃闘争を引き継いでくれたりするかもしれない。

とにかく、一刻も早く抗議行動の改革に着手し、第三、第四の核実験を何としてでも阻止しようではないか。



・・・From Editor Jane

いささかヘヴィな第3号をお送りします。

「Crazy Jane」は、生育環境も思想背景も交友関係もまったく異なる3人の人間が、それぞれの「違い」を生かしながらかついているミニコミです。それだけに多様な意見が展開される場でありたいし、まさしくその分裂ぶりこそが「Crazy Jane」の身上でありましょう。言葉を換えれば、あくまで「クレイジー」さを失わないということです（正論吐くばかりの「いい子ちゃん」になっちゃあ「クレイジー・ジェーン」の名が泣くぜ）。

掲載された文章への異論・反論などがありましたら、遠慮なく誌面上でおこなってください。各種投稿歓迎です（ただし没もありえます）。

次号原稿の〆切は12月8日、発行は年明け早々になります。

本誌第1号の書評で取り上げた『今かくあれども』の作者、米国の詩人・小説家であるメイ・サートンが83歳で亡くなったことを最近知りました。まだ一度も読んでことのない方には『独り居の日記』（みすず書房）をすすめます。（蟲）

Crazy Jane 第1期 vol.3

1995. 10. 21

加入者名 「クレイジー・ジェーン」